The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	北京故宮博物院蔵『華夷訳語』丁種本第1類の分析 : 西洋館訳語の編纂とドイツ語の名称の問題を中心に
Author(s)	田野村, 忠温
Citation	待兼山論叢. 文化動態論篇. 2020, 54, p. 1-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91392
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

北京故宮博物院蔵『華夷訳語』丁種本第1類の分析

――西洋館訳語の編纂とドイツ語の名称の問題を中心に――

田野村　忠温

キーワード：『華夷訳語』丁種本／西洋館訳語／「額[illegible]馬尼雅」／北京故宮博物院

1　はじめに

北京故宮博物院蔵の『華夷訳語』丁種本写本は、各冊の冒頭に「西洋館」という編纂組織名の表示のある欧州の5言語――ラテン語、ドイツ語、ポルトガル語、フランス語、イタリア語――の語彙集を含む。それらは、同じく北京故宮博物院蔵『華夷訳語』丁種本写本の1つであるチベット語語彙集の見出し語と様式に従って編まれている。

本稿では、近年出版されたそれらの影印本を使い、チベット語と欧州5言語の語彙集の概要を確かめたうえで、関連する2つの問題、すなわち、欧州5言語の語彙集の編纂、および、ドイツ語語彙集の書名に使われている、原語も読みも不詳のドイツ語の名称の問題を考察する。2つの問題は性質がまったく異なるように見えて、実のところ互いに密接に関係している。

いずれの問題も特定の語彙集だけの観察によっては解決することができない。当該の6言語の語彙集の比較対照を通じて難問の解明を試みたい。以後、一部の引用の文脈を除き、漢字は原則として現代日本の字体による。

2　北京故宮博物院蔵『華夷訳語』丁種本の3類

『華夷訳語』は明清代の中国で編まれた漢民族の言語と異民族の言語の官

撰対訳語彙集の総称であり、14 世紀の甲種本から 18 世紀の丁種本に至るまで数世紀にわたって編纂が繰り返された。[1] 古い『華夷訳語』には語彙集に加えて文例集を含むものもあるが、丁種本はいずれも語彙集だけである。

1931 年にドイツ人中国学者 W・フックス（Walter Fuchs、中国名福克司）が北京の故宮博物院で『華夷訳語』丁種本の写本を多数発見した（Fuchs（1931））。それは 42 種類にのぼる言語、方言の語彙集であり、そこにはアジアの諸言語のほか上述の欧州 5 言語および英語の語彙集が含まれていた。欧州の言語の『華夷訳語』は故宮博物院に写本が残っているだけである。

故宮博物院の『華夷訳語』丁種本はその後長いあいだ公開されず研究に容易に利用することができなかったが、近年そのすべてが故宮博物院編（2018）として影印出版された。

故宮博物院編（2018）所収の語彙集は、筆者の見るところによれば、訳語の注音の方式に基づいて表1に示す3類に分けることができる。[2]

表1　故宮博物院蔵『華夷訳語』丁種本の3類

	注音方式	収録語彙	語彙集
第1類	1)訳語の音節に基づき注音（小字、合成字を使用） 2)用字を統一	乙種本『西番訳語』の語彙を大幅に増補、項目はすべての語彙集でほぼ共通（約2,100語）	『西番館訳話』（チベット語） 『拉氐諾話』（ラテン語） 『額呼馬尼雅話』（ドイツ語） 『播呼都噶礼雅話』（ポルトガル語） 『弗喇安西雅話』（フランス語） 『伊達礼雅話』（イタリア語） （西洋館訳語）
第2類	音節末子音などの表示に小字を使用	多く『華夷訳語』乙種本の語彙をそのままないし調整して使用（約70～1,200語） 『喫咭唎国訳語』は乙種本『西番訳語』に同じ	『暹羅番書』 『緬甸番書』 『蘇禄番書』
第3類	通常の漢字連続による注音		『西番訳語』9種（チベット語方言他） 『喫咭唎国訳語』（英語） 『琉球語』他多数

語彙集の書名にはしばしば本文と題簽とで不一致が見られる。ここでは原則として本文に記された書名を用いる。本文の書名は確実に語彙集編纂時のものだと言えるのに対し、題簽の書名は後世に書かれたものである可能性を排除できず――筆者は語彙集の現物を見ておらず、この問題に関して明確なことを言うことができない――[3]、また、いずれにせよ題簽の書名には本文

からの書写時に生じたと見られる脱字もあり（後述）、信頼性が劣るからである。Fuchs（1931）では論述にもっぱら各語彙集の本文の書名が使われており、それとは異なる題簽の書名への言及はない。[4] ドイツ語の語彙集について述べた Fuchs（1937）でも本文の書名が引用されているだけである。題簽固有の書名を先行研究中に初めて確認できるのは馮（1981）においてであり、そこでは『川番訳語』など題簽の書名がいくつか付記されている。西洋館訳語の題簽の書名は楊（1985）に見られるのが最初で、脱字も含めて題簽の通りに書かれている。[5]

本稿で考察の対象とする第 1 類に属する 6 種類の語彙集――チベット語と欧州 5 言語の語彙集――は注音の方式が精密かつ統一的で、収録語彙も多い。チベット語語彙集は、本文に書名の記載がなく、各冊の冒頭に「西番館」という編纂組織名の表示があるだけである。題簽には「西番訳語」と書かれているが、第 3 類の『西番訳語』との重複を避けるためにもここでは『西番館訳語』とする。そして、第 1 類の欧州 5 言語の語彙集を総称して「西洋館訳語」と呼ぶ。

第 2 類と第 3 類の区別には不透明な要素がある。単純な開音節しか持たない言語の場合はその対立が中和されるからである。しかし、第 3 類の語彙集に記録されたすべての言語の音節構造を確認することは困難なので、ここでは注音に小字が使われているかどうかという基準によって単純に分類する。別の分類方法として、第 1 類以外をまとめて第 2 類とし、表 1 の第 2 類と第 3 類をその下位類とすることもできる。本稿の目的にとって実質的な違いはなく、ここでは各類への言及の便宜を優先して平面的な 3 分類とする。

故宮博物院蔵『華夷訳語』丁種本には英語の語彙集である『暎咭唎国訳語』も含まれるが、第 3 類に属する。西洋館訳語とは性質の大きく異なる『暎咭唎国訳語』については拙論（2021）で考察する。

以後、「故宮博物院蔵『華夷訳語』丁種本第 1 類」を「『華夷訳語』丁種本第 1 類」あるいは単に「第 1 類」と略記する。

3 『華夷訳語』丁種本第1類の概要

まず、次節以下での考察の前提として、『華夷訳語』丁種本第1類の概要を述べる。『華夷訳語』丁種本の語彙集では、各項目が中国語の見出し語、その訳語、訳語の漢字による注音という3つの要素で構成されている。[6)]

3.1 見出し語

第1類の語彙集の見出し語は、『華夷訳語』乙種本に属するチベット語語彙集『西番訳語』の740件の見出し語を大幅に増補したものである。収録項目数は『西番館訳語』が2,103件、西洋館訳語がいずれも2,070件内外である。それが次の20の門に分けて収められている。

天文門、地理門、時令門、采色門、身体門、人物門、器用門、宮殿門、飲食門、衣服門、方隅門、珍宝門、経部門、文史門、鳥獣門、数目門、通用門、香薬門、花木門、人事門

西洋館訳語ではこのうち「珍宝門」と「経部門」の順序が入れ替わっている。

『西番館訳語』と西洋館訳語の収録項目数に関する約30件の差は、『西番館訳語』にあった項目のうち、主としてチベットに関わりの深い見出し語が西洋館訳語では省かれたことによる。例えば、「喇嘛」「和尚」「比丘」（人物門）、「鈸」「鐃」「雲鑼」[7)]（器用門）、「皮裘」「罟窟帽」（衣服門）、「雲鴈」「青鴿」「鸚鵡」（鳥獣門）などが削除されている。これらの項目の多くは乙種本『西番訳語』にあるので、先に『西番館訳語』の項目が決められ、そこから不要と見なされたものが省かれたらしいことが分かる。逆に、「街」（宮殿門）の項目は『西番館訳語』になく、西洋館訳語だけにある。これも乙種本『西番訳語』にあり、『西番館訳語』の漏れを補ったものと見ることができる。[8)]

3.2　注音

第 1 類の語彙集の注音は、音節の単位を明示する形で行われている、注音に用いる漢字が相当の程度に統一されている、という 2 点の特徴を有する。『西番館訳語』と西洋館訳語 5 種とで一部に異なる点があるので、ここでは西洋館訳語を中心に述べる。

3.2.1　音節単位の注音

ドイツ語の語彙集の「星」の項目（天文門 4）には次のように書かれている。中国語の見出し語が中央に書かれ、その上にドイツ語の訳語、下にその注音が配置されている。「（天文門 4）」の 4 は影印本での頁番号である――故宮博物院蔵『華夷訳語』丁種本はいずれも葉数の表示がない――。

図 1　ドイツ語語彙集の「星」の項目

中国語の見出し語を中央に据え、異言語の訳語と注音をその上下――ないし左右――に配するこの書き方は、筆者の憶測によれば、華夷秩序すなわち中華思想の図像的表現である。ともあれ、この紛らわしい記法が『華夷訳語』の研究者にしばしば見出し語と訳語の関係に関する誤解をもたらしている。

注音は右から左に向かって書かれており、訳語 Sterne の第 1 音節 [ʃter] は [te] という音節を表す「徳」の上下に子音 [ʃ] と [r] を表す小字の「斯」「呼」を加えることによって注音されている。[9] 第 2 音節の [ne] の注音は「訥」の 1 字である。ここでの引用においては、字順を逆転させ、印刷の便宜上小字の

配置も変えて「斯徳呼訥」のような形とする。また、字数の多い注音は読みにくいので、複合的な訳語の場合は次のように分かち書きする。

四季 vier Eintheilungen des Jahrs 費呼 愛尼代隆根 徳斯 雅呼斯（時令門89）

訳語の綴りには現代の標準と異なるものや誤記と見られるものがあるが、原則として語彙集における表記の通りに示す。大文字と小文字の使い分けにはばらつきが大きいので現代の基準で調整、統一する。

(A) 小字

音節を明示するのに使われている方法の1つが、「星」の項目にもあった音節の冒頭および末尾の子音を表す小字の使用である。「星」以外の項目の例を次に示す。以後、語彙集からの項目の引用にはすべて言語名を添える。

ドイツ語：道 Stras 斯徳喇斯（地理門53）[10)]
ドイツ語：黄 gelb 格勒補（采色門102）
ドイツ語：問 fragen 弗喇根（人事門499）

音節の中核を表す漢字の上下に書かれた小字の「補」は [p] ないし [b]、「徳」は [t] ないし [d]、「弗」は [f]、「斯」は [s] ないし [ʃ]、「勒」は [l] の各子音を表す。

(B) 合成字

音節を明示するためのもう1つの方法は、2字を一体化させた合成字の使用である。合成に使われる第2字は「愛」「傲」「安」「昂」の4つで、前二者は二重母音 [ai]、[au] の後半、後二者は [n]、[ŋ] の子音を第1字の発音に加えることをそれぞれ表す。

哷 [re] + 愛 [(a)i] → 哷愛 [rei]
喇 [ra] + 傲 [(a)u] → 喇傲 [rau]
費 [fi] + 安 [(a)n] → 費安 [fin]
魯 [lu] + 昂 [(a)ŋ] → 魯昂 [luŋ]

2 例を挙げれば次の通りである。

ドイツ語：煙 Rauch 喇傲赫（天文門 8）[11)]
ドイツ語：暗 finster 費安斯德哷（天文門 16）

合成字 1 字によって反切を示す記法は伝統的に「切身」と呼ばれる（孫（2020））。第 1 類の合成字はそれに似るが、第 1 字の表す音節をすべて読み、第 2 字は韻母ではなくその一部だけを使うという点において、本来の切身字とは異なる。

『西番館訳語』では合成字は使われず、「愛」「傲」「安」「昂」は次のように小字で示されている――音節末の [m] を表す「穆」も同様である――。

チベット語：七 བདུན 都安（数目門 387）

この「都安」―― [dun] という音節を表す――は合成字の「都安」に相当するが、西洋館訳語では [dun] は実際には「呑」の字で表される。

西洋館訳語で合成字が導入された目的は、筆者の推定によれば、小字の節減にある。『西番館訳語』では大書する注音字は基本的に単純な開音節を表す（施（2016, 2019））。その方式によって例えば [plants] という発音を注音すれば「伯拉安特斯」のようになる。しかし、欧州の言語にはそうした複雑な音節が多い。そこで [lan] を 1 字で表し、「伯蘭特斯」と注音することによって、小字の使用を 1 字減らす。そして、漢字 1 字で表すことのできない同じ型の音節、例えば [fin] は合成字によって「費安」と注音する。このような考慮に

基づいて「愛」「傲」「安」「昂」を第 2 字とする合成字の記法が定められたものと考えられる。

小字およびそれと同じ機能を託された合成字の使用によって、単一の漢字では表せない異言語の音節を 1 音節として注音することが可能になっている。[12] 小字も合成字も使わない『華夷訳語』丁種本第 3 類の『暎咭唎国訳語』では、例えば「土星」の項目（天文門 6）で Neptune という 2 音節の訳語が「聶比都呶」という 4 音節の形で注音されている。それを西洋館訳語の方式で書き直せば「聶比都呶」となる。

また、19 世紀アヘン戦争後のロバート・トーム（Robert Thom、羅伯聃）による英語学習書『華英通用雑話』上巻（1843（道光 23）年）でも英語の注音が音節に基づいて行われており（拙論（2020b））、同書での「合（念）」と「切」を添えた表記は西洋館訳語の小字と合成字による表記におおむね相当する。「聶比都呶」を『華英通用雑話』の方式で書けば「聶比都呶」となる。

3.2.2　注音字の統一

第 1 類の語彙集における注音は、使用する漢字に関しても統一が図られている。これは、基準とすべき注音字の一覧表が各語彙集の編纂者に対して示されたことによって実現したものと考えられる。

施（2016, 2019）に『西番館訳語』におけるチベット語の注音方法に関する詳細な考察がある。西洋館訳語で使われている注音字もそれを基礎としている。西洋館訳語で主要な音節の注音によく使われている、大書される漢字の一部を示せば表 2 の通りである。表の右半分に関わる二重母音や鼻音で終わる音節は『西番館訳語』では上述の通り大小 2 字の組合せによって注音される。

表2　主要な音節の注音に使われている主な漢字

	a	e	i	o	u	ai	…	an	…	aŋ	…
ϕ	阿	額	伊	鄂	烏	愛		安		昂	
p, b	巴	伯	畢	播	補	拝		班		邦	
t, d	達	徳	氏	多	都	代台		丹		当	
k, g	嘎噶喀	格	基	郭科	沽	該		干甘		剛	
s, z	薩	塞	西	莎	蘇	賽		三		桑	
h	哈	赫	希	和豁	胡	海		漢痕		杭	
m	馬	墨	密	莫	穆	邁		満			
n	納	訥	尼	諾	努	鼐		難			
l	拉	勒	礼	羅	魯	来賚頼		蘭		郎	
r	喇	呼	哩	囉	嚕						
j	雅	葉		岳	兪禹						
…											

そして、小書され、音節頭、音節末の子音を表すのに使われている主な漢字は表3の通りである。『西番館訳語』では音節末の鼻音そして二重母音の後半を表す字もこの類に属する。

表3　子音だけを表すのに使われている主な漢字

	音節冒頭	音節末尾
p, b	伯	伯補
t, d	徳	特
k, g	格	克
s, ʃ	斯施	斯
l		勒
r		呼
…		

西洋館訳語の各語彙集の編纂者はこのような注音字の一覧表に基づき、各言語の事情に応じて必要な拡張を行いつつ注音を行ったものと見られる。拡張について言えば、例えば次のように小字の「斡」「赫」「烏」「伊」「知」を使った注音は特定の言語の語彙集にのみ現れる。

ラテン語：水流 aqua fluens 阿沽$_{\underline{斡}}$弗魯恩$_{斯}$（地理門71）

ドイツ語：八 acht 阿$_{\underline{赫}特}$（数目門379）

ポルトガル語：土 chão 扎昂$_{\underline{烏}}$（地理門44）

フランス語：昨日 hier 伊額哷（時令門96）
イタリア語：天 cielo 知額羅（天文門3）

「赫」は子音を表しているが、「斡」「烏」「伊」「知」は（子音＋）母音を表しており、小字の用途自体も拡張されていることになる。[13)]

表2、表3に見る通り、子音の有声、無声の区別は無視されている。施（2019）によれば、当時の書面チベット語における閉鎖音、摩擦音、破擦音が無声化していたので、そのことの反映であろう。ただし、この有声、無声の同一視には例外があり、イタリア語の語彙集は[ka]を「嘎」――ときに「喀」――、[ga]を「噶」によって注音し、[ko]を「科」、[go]を「郭」で注音している。しかし、イタリア語語彙集においても、[ku]と[gu]はともに「沽」で注音され、[p]と[b]、[t]と[d]も同一視しているなど、音韻上一貫した表記にはなっていない。[14)]

また、これも2つの表を確かめれば分かるように、[l]で始まる音節および[l]の子音の表示には口偏を持たない来母字――声母がlである漢字――が使われ、[r]で始まる音節および[r]の子音の表示には口偏を持つ来母字が使われている。これは梵語や西夏語の注音に由来する慣習である（孫（2010, 2020）、施（2016, 2019）など）。

ちなみに、トームの『華英通用雑話』でもlとrが口偏の有無によって不完全ながら書き分けられているが、『華英通用雑話』は既存の来母字に口偏を加えて新しい字を作り出すことも行っているのに対し、第1類の語彙集はもっぱら既存の漢字から注音字を選んでいるという違いがある。

3.3　西洋館訳語の正しい書名

第1類の語彙集における注音の方式を一通り確かめた今、従来の研究における西洋館訳語の書名の扱いの誤りを確認、訂正することができる。

ラテン語語彙集『拉氐諾話』とイタリア語語彙集『伊達礼雅話』の書名はそのように書けば問題がない。また、ドイツ語語彙集の書名は『額哷馬尼雅

話』であり、小字を使わない書き方でそれが『額呼馬尼雅話』になることはやむを得ない。

問題は、ポルトガル語語彙集とフランス語語彙集の書名である。ポルトガル語語彙集については、題簽における誤った国名「播都噶礼雅」―― [r] を表す「呼」が脱落している――が使われることがあるが（楊（1985）、春・李・郭（2018b）など）、正しくは「播呼都噶礼雅」である。

フランス語語彙集は、本文、題簽ともに書名の書き方が適切でないこともあって「弗喇安西雅」などのように書かれたり（施（2016）、春・李・郭（2018b）など）、「弗安喇西雅」という字順で書かれたり（Fuchs（1931）、楊（1985）、聶（じょう）・王（2011）など）するが、「喇」と「安」の２字の合成によって [ran] を表し、それに先行する子音の [f] を「弗」で表しているのであるから、正しくは「弗喇安西雅」としなければならない。「弗喇安西雅」や「弗安喇西雅」はそもそも第１類の注音として読むことのできない表記である。

故宮博物院編（2018）で使われている西洋館訳語の書名がすべて誤っているか、不確実な要素を含んでいることは注意に値する。そこでは目次その他でも解題（春・李・郭（2018b））でも題簽に記された『～語』という形の書名が使われている――「話」と「語」の問題については注５を参照――。西洋館訳語の影印本という重要な出版物であるだけに今後の研究に対する悪影響が懸念される。各語彙集の確実に正しい書名は次の通りである。[15)]

ラテン語：	『拉氐諾話』	（『拉氐諾語』は不確実）
ドイツ語：	『額呼馬尼雅話』	（『額呼馬尼雅語』は不確実）
ポルトガル語：	『播呼都噶礼雅話』	（『播都噶礼雅語』は誤り）
フランス語：	『弗喇安西雅話』	（『弗喇安西雅語』は誤り）
イタリア語：	『伊達礼雅話』	（『伊達礼雅語』は不確実）

4　西洋館訳語の編纂

さて、これより本稿の中心的な主題の考察に入る。西洋館訳語は誰によってどのように編纂されたのか、これが第1の問題である。

4.1　西洋館訳語の編纂者

『西番館訳語』はチベット語と中国語の知識を有する単一ないし複数の人物によって編纂されたと考えられるが、西洋館訳語5種の編纂者はどうだったのであろうか。少なくとも語彙集の漢字の部分の浄書は中国人によって行われたであろうし、その他の補助――見出し語の意味の説明など――を中国人が行ったことも考え得るが、ここで言う編纂者とは対訳語彙集作成の核心的な作業を担当した人物、すなわち、見出し語の訳語を考えて書いた人とその注音を行った人のことである。これには次の3つの可能性が考えられる。

(A) 中国人が翻訳と注音を行った。
(B) 西洋人が翻訳し、中国人が注音した。
(C) 西洋人が翻訳と注音を行った。

まず、(A) は容易に否定される。西洋館訳語を編めるほど欧州の言語に通じた中国人はいなかったであろうし、また、中国人であれば犯すはずのなかった誤訳の例も多数見出されるからである――後にその実例を見る――。

常識的に想像しやすいのは (B) である。すなわち、西洋人が訳語を考えて書き留めるとともに読み上げ、中国人がそれを聞いて注音したという可能性である。[16] 実際、『暎咭唎国訳語』はその方法によって編まれたと考えられる（拙論（2021））。しかし、私見によればこれも否定される。なぜならば、西洋館訳語の注音にはそれが中国人によって行われたことを思わせる要素がほとんど見られないからである。例えば、音節数や音節境界の誤認、lと

rの混同、子音のあとへの母音挿入、[17] 聞こえの小さい音節末子音の書き漏らしなど、もし当該の言語に通じていない中国人が注音したとすれば頻発したはずの現象がきわめて少ない。

また、rの文字で表される音声は言語によって、また、音韻環境によっても大きく異なるにもかかわらずそれが一貫して同一のものとして扱われているという事実も注目に値する。現代の通俗的な語学指南書においては、ドイツ語の例えばReise（旅行）の第1音節は語学書によって声母を異にする「海」「頼」「艾」などの字によって注音され、音節末のrは「爾」などで示されたり、省かれたりしている。ポルトガル語のrは語頭では [x] を声母とする字、語中尾では [l] を声母とする字で注音されている。フランス語のrは一律に [x] を声母とする字で注音され、イタリア語のrはlとして注音されている。そうした多様な注音は、当該の言語の発音の中国人による知覚の反映である。それに対し、西洋館訳語ではrがその言語間および言語内の音声的差異にかかわらず単一のものとして扱われ、かつ、省かれることもなく、常に口偏を有する来母字によって表示されている。これは、現代の語学指南書の注音は個別言語の異音の次元で行われ、西洋館訳語の注音は個別言語の音素をも超えた“通言語的音素”の次元で行われていることを意味する。もし語彙集の訳語が読みやすい字で書かれていれば、各言語に通じていなくてもrの綴りに頼って統一的な注音を行えたであろうが、西洋館訳語の訳語にはその語を知らなければ判読のむずかしい字がきわめて多い。中国人が訳語を見て注音したのであれば誤読による注音の誤りが無数に生じたはずであるが、そうした事例は見当たらない。

したがって、西洋館訳語の訳語の考案と注音はいずれも西洋人によって行われた、すなわち、（C）であったと筆者は推定する。[18] そして、その西洋人は、ドイツ、ポルトガル、フランス、イタリアの4言語については、それぞれの母語話者――ないし、その言語に熟達した人物――であったと考えるのが自然である。各語彙集の編纂が複数の人物の分担によって行われた可能性もあるが、1人でも行える作業である。[19]

4.2　ラテン語語彙集の編纂者

では、母語話者のいないラテン語の語彙集の編纂はどうだったのであろうか。ラテン語は、教養の高い西洋人であれば、誰でも翻訳し、また、注音することができた――無論それは中国語や注音法の理解を必要とするが――。したがって、素朴な想像によれば、いずれかの国の西洋人が 4 言語の語彙集と同じ方法で編纂したということになる。

しかし、筆者の推定によれば、真相はそれよりも複雑であった。結論を先に述べれば、ラテン語語彙集の訳語はおそらくイタリア語語彙集の編纂者によって書かれ、ドイツ語語彙集の編纂者がそれを見て注音した。ラテン語語彙集の編纂がそのような分担作業によって行われたことが、西洋館訳語のすべての語彙集を対比して分析することで見えてくる。

まず、同じ見出し語に対する語彙集ごとの訳語の関係は項目ごとに異なるものの、ラテン語の訳語は全体としてイタリア語の訳語に意味上近い。ドイツ語の訳語は訳語の異質性が最も高く、ポルトガル語とフランス語はイタリア語とドイツ語の中間である。西洋人が正確に訳せない可能性の予想されるいくつかの見出し語――「仏境」「釈迦」「三宝」「声聞」「帰依」「輔教」「行書」「読雑字」[20]――に関する各語彙集の訳語の対比を表 4 に示す。訳語中には現に誤訳も散見される。意味が近い訳語はます目の背景を暗くして示している。[21]

訳語の相互関係から考えて、もしラテン語の訳語を準備したのがいずれかの西洋館訳語の編纂者であったとの前提で考えれば、それはイタリア語の語彙集の編纂者であった可能性が最も高いと言える。ラテン語語彙集とイタリア語語彙集はいずれも訳語がおそらく Humanist Minuscule と呼ばれる共通の書体（Knight（1996））で書かれ、筆跡も似ている。ただし、同一人物の筆跡であるとの認定には迷う要素もある。したがって、ラテン語への翻訳者はイタリア語語彙集の編纂者ではなく、共通の来歴を有し同じ書体を使うほかのイタリア人であったのかも知れない――あるいは、イタリア語語彙集の

表4　西洋館訳語における訳語の対比

	ラテン語	イタリア語	ポルトガル語	フランス語	ドイツ語
仏境 (地理門64)	Fo provincia (仏の州)	provincia del Fo (同左)	confins do Fo (仏の境界)	les Indes (インド諸国)	Landshafft des Fo (仏の地方)
釈迦 (経部門305)	effigies Fo (仏の像)	ritratto del Fo (仏の肖像)	os que seguem Fo (仏に従う者たち)	nom de Fo (仏の名)	Götzenbild des Fo (仏の偶像)
三宝 (経部門307)	locus Fo (仏の場所)	luogo del Fo (同左)	lugar do Fo (同左)	3 bijou (3つの宝)	Orth zur Verehrung des Fo (仏を拝む場所)
声聞 (経部門308)	fama (名声)	fama (名声)	thema (テーマ)	reputation (評判)	die Stim hören (声を聞く)
帰依 (経部門309)	fieri Bonzium (仏を誇る)	farsi Bonzo (仏を得る)	fazer Bonzo (仏教徒になる)	sectateur de Fo (仏を強く信じる人)	den weltlichen Standt veränderen (世界の位置を変える)
輔教 (経部門313)	juvare legem (仏法を助ける)	promolgare la legge (仏法を広める)	pregar (伝道する)	aider a propager la loi (仏法の普及を助ける)	Beÿhelfer in der Lehr (助教)
行書 (文史門335)	currentes literæ (流れるような文字)	caratteri correnti (同左)	letra currente (同左)	lettres courantes (同左)	sehlechte Schreibens Art (実際の書体)
読雑字 (文史門344)	legere varias literas (さまざまな字を読む)	studiare lettere in confuso (混乱した字を学ぶ)	ler varias letras (さまざまな字を読む)	lire toute sorte de lettres (あらゆる種類の字を読む)	vershidene Buchstaben lesen (さまざまな字を読む)

編纂者の翻訳を別のイタリア人が浄書したという可能性も考え得る――。状況は不透明であるが、少なくとも、ドイツ語、ポルトガル語、フランス語の語彙集の編纂者であった可能性は相対的に低いということは言える。

なお、表4における訳語の関係から、まずラテン語の訳語を準備し、そこを起点としてほかの4言語に翻訳したわけではないことも分かる。もっとも、ラテン語とイタリア語の訳語が近いだけでなく、ラテン語とイタリア語以外の言語の訳語のあいだにもある程度の依存関係はありそうである。そのあたりの事情を明らかにするためにはさらに多くの項目の比較が必要である。[22)]

他方、ラテン語語彙集の注音者は確実に特定することができる。すなわち、注音を行ったのはドイツ語語彙集の注音者であった。ドイツ語とラテン語の語彙集の注音に共通する3種類の事実があるからである。

第1に、注音字の変更が同時的に行われていることである。両語彙集は [ka] と [ga] を区別せず「嘎」ないし「噶」によって注音しているのであるが、いずれも冒頭の「天文門」から「文史門」まで一貫して「嘎」を使い、「文史門」に続く「鳥獣門」以後は一貫して「噶」を使っている。この注音字の変更の動機や理由は不明であるが、偶然によっては生じ得ない一致である。注音者が両語彙集の注音を同時平行的に行ったものと推定される。

音節末の [p]、[b] を表す注音字も [ka]、[ga] とほぼ同じ箇所で「補」から

「伯」に切り替わっている。ただし、ドイツ語語彙集は「文史門」まで「補」を使い、「鳥獣門」から「伯」に変えているのに対し、ラテン語語彙集は「文史門」から「伯」を使っている。この変更のタイミングのずれから、少なくとも当該の箇所に関しては、ドイツ語語彙集の注音が先に行われ、ラテン語語彙集の注音がその後に行われたことが分かる。

第 2 に、ラテン語の注音にドイツ語固有の注音が混入している。具体的には、ドイツ語の音節末の [ç]、[x] を表すのに使われている「赫」がラテン語の語彙集にも現れる。その1つは「竜」の項目である。

ドイツ語：竜 Drach 徳喇赫（鳥獣門 357）
ラテン語：竜 draco 徳呼赫（鳥獣門 357）

図2　ドイツ語語彙集（左）とラテン語語彙集（右）の「竜」の項目

語形の類似が注音者によるドイツ語との混乱を招いたものと見られる。ドイツ語の 1 音節の Drach と異なり、ラテン語の draco は 2 音節であり、正しくは「徳呼郭」ないし「徳呼科」という注音でなければならない。[23] ラテン語語彙集ではほかに「杓」と「匙」の 2 項目（器用門 204、205）の注音にも小字の「赫」が現れる。

第 3 は、ge という綴り字の注音に関わる少々複雑な事情である。そのドイツ語での発音は [ge]、ラテン語での一般的な発音は [ge] ないし [dʒe] である。そのような発音を注音すれば、ドイツ語では「格」になり、ラテン語で

は「格」ないし「熱」になる。しかし、注音者はラテン語の ge を [dʒe] の子音の弱化、消失した [je] ないし [e] という発音で読んでいたと推定され、「葉」ないし「額」で注音している――表2に示したように、「葉」と「額」は西洋館訳語の全語彙集を通じて一貫してそれぞれ [je]、[e] の注音に使われている[24]――。ドイツ語とラテン語の語彙集における ge の注音は基本的に次のようになっている。

ドイツ語：走 gehen 格恩（人事門487）
ラテン語：将軍 generalis 葉訥喇礼斯（人物門167）
ラテン語：読 legere 勒額呼（文史門331）

注音者はラテン語の generalis を [jeneralis]、legere を [leere] と読んでいることになる。そのようなラテン語の読み方が使われていた地域や時期は不明であるが、音韻の対応の型としては、Jesus、Jupiter、Japan のような語の冒頭の子音を英語では [dʒ] と発音するところをドイツ語では [j] で発音するのと共通である。

ところが、ge の注音に関して、ときに双方向の混同が見られる。1例ずつ示せば次の通りである。

ドイツ語：将軍 Kriegs-general 格哩克斯 葉訥喇勒（人物門167）
ラテン語：凍 gelu 格魯（時令門87）

ここではドイツ語の General を [jeneral]、ラテン語の gelu を [gelu] と注音しているが、いずれも注音の誤りだと考えられる。正しくは、前者は「～格訥喇勒」であり、後者はほかの項目での注音との関係上「葉魯」ないし「額魯」となるべきところである。ドイツ語の語彙集におけるこの種の混乱は上の「将軍」の1項目だけであるが、ラテン語の語彙集においては同類の混乱、例外が少なくとも10件近くある。ラテン語の ge の綴りを「格」で注音するこ

と自体は本来誤りではないが、ラテン語語彙集の大多数の注音を基準として言えば逸脱的だということである。

以上のような3種類の特異な事実の符合から、ラテン語語彙集の注音を行ったのはドイツ語語彙集の注音者であったと確実に言うことができる。そして、その人物はおそらく、乾隆帝から西洋館訳語5種編纂の委託を受け、かつ、ドイツ語語彙集を編纂したポーランドのニエモドリン（Niemodlin）出身の宣教師F・J・バー（Florian Joseph Bahr、魏継晋）（Fuchs（1937））であろう。[25)]

4.3　西洋館訳語の相互関係

『華夷訳語』丁種本第1類の語彙集の収録項目数は『西番館訳語』が2,103件、西洋館訳語が2,070件内外であることを先に述べた（3.1）。

筆者の推定によれば、第1類の語彙集における収録項目の差は図3に示すような段階的な修正が加えられたことによって生じた。[26)]

『西番館訳語』（2,103項目）
　↓33項目を削除（各種の門）、「街」を追加（宮殿門）
ラテン語、ドイツ語両語彙集（2,071項目）
　↓「大乗」を追加（経部門）、「臨洮」「河州」「地池」を削除（通用門）
ポルトガル語語彙集（2,069項目）
　↓「白芨」を追加（香薬門）
フランス語語彙集（2,070項目）
　↓「神鬼」を追加（人事門）
イタリア語語彙集（2,071項目）

図3　第1類語彙集の見出し語の調整過程

すなわち、まず『西番館訳語』の見出し語から不要と考えられるものを省いてラテン語とドイツ語の語彙集の見出し語を準備し、その後2～3度にわ

たって必要なものを補ったり不要なものをさらに省いたりしてポルトガル語、フランス語、イタリア語の語彙集の見出し語とした。見出し語の調整を行った人物が誰であったかは分からない。西洋館訳語編纂の主事者であるバーであったとすれば自然ではあるが、それを確認できる証拠はない。

追加された見出し語のうち「大乗」と「白芨（びゃくきゅう）」はともに『西番館訳語』にある。イタリア語語彙集に追加された「神鬼」は『西番館訳語』にも乙種本『西番訳語』にもなく、しかも、当の項目は見出し語だけで訳語と注音を欠いている。「神鬼」はことによっては当の語彙集の編纂者が自身の関心から加えたものであったのかも知れない。[27)]

なお、正確を期して言えば、ドイツ語語彙集では元来「身体門」と「鳥獣門」の両方にあった「頭」の項目が「鳥獣門」で不完全に消去されている——ドイツ語の訳語だけが残っている——。これを統計から除外すれば、項目数は2,070になる。[28)]

第1類の各語彙集の編纂開始もおおむね図3に示した見出し語の調整の順序であったと考えられる。すなわち、まずバーがラテン語とドイツ語の語彙集の編纂に着手した。ラテン語の訳語の準備はラテン語に精通したイタリア人——慎重に言えば、イタリア語に通じた人物——に依頼した。その後、ポルトガル語、フランス語、イタリア語の語彙集の編纂がそれぞれの言語の母語話者——ないし、それに通じた人物——によって始められた。

ラテン語とドイツ語の語彙集と、ポルトガル語、フランス語、イタリア語の語彙集とで編纂開始の時期がずれていたことは注音字の観点からも確かめられる。ラテン語とドイツ語の語彙集では [ka]、[ga] の注音字が途中で「嘎」から「噶」に変更されたが（4.2）、ポルトガル語とフランス語の語彙集では最初から一貫して「噶」が使われている。また、音節末の [p]、[b] を表す注音字が「補」から「伯」に変わったが（同前）、ポルトガル語とイタリア語の語彙集では一貫して「伯」が使われている。

ただし、各語彙集をめぐる状況は複雑で、イタリア語語彙集では [ka] と [ga] がそれぞれ「嘎」と「噶」によって注音し分けられている（3.2.2）、フ

ランス語語彙集では一部の門で「補」が使われているなど、種々の事実が錯綜している。ここに述べた推定をより精密なものとするには、さらに多角的な分析が必要である。[29)]

5　ドイツ語の名称

西洋館訳語 5 種の書名に使われている言語名についてはすでに研究があり、ドイツ語以外の言語については妥当と思われる解釈がすでに与えられている。

5.1　ドイツ語以外の言語の名称

西洋館訳語 5 種の書名は、ラテン語の語彙集が『拉氐諾話』、ドイツ語が『額[呼]馬尼雅話』、ポルトガル語が『播[呼]都噶礼雅話』、フランス語が『[弗]喇按西雅話』、イタリア語が『伊達礼雅話』である（3.3）。ラテン語以外はいずれも最後の「話」を除いた部分が「雅」で終わっている。

この言語名の問題についてはすでに聶（2016）と李（2019）に考察がある。聶は、西洋館訳語 5 種の書名に含まれる固有名詞の部分がすべてラテン語であると論じ、「拉氐諾」「額[呼]馬尼雅」「播[呼]都噶礼雅」「[弗]喇按西雅」「伊達礼雅」のもとの語形をそれぞれ Latinum、Germania、Portugalia、Francia、Italia と推定した。これに対し、ラテン語の語彙集について考察した李は、「拉氐諾」は Latinum ではなく Latino であると論じた。実際、表 2 を見れば分かるように、「拉氐諾」という注音は [latino] という発音を表す。

聶の推定と李の訂正によって書名、すなわち、言語名の問題はほぼ解決が付いたが、ドイツ語語彙集の書名に現れる「額[呼]馬尼雅」という固有名詞、すなわち、ドイツ国名にはそれがどのような原語、発音を表しているかという問題が残っている。

5.2 「額哷馬尼雅」――従来の見解

この問題について最初に見解を示したのは、故宮博物院で『華夷訳語』丁種本を発見したフックスである。フックスは、ドイツ語の語彙集について論じたFuchs（1937）において、『額哷馬尼雅話』をngo-lo-ma-ni-ya huaとローマ字化している。

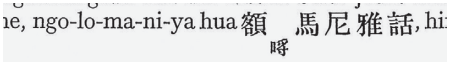

図4　フックスのngo-lo-ma-ni-ya

フックスは「額哷馬尼雅」の原語を聶と同じくラテン語のGermaniaと見なしているものと考えられる。しかし、「馬尼雅」をma-ni-yaと読むことは自然であるが、冒頭の「額哷」をngo-loと読む根拠は示されていない。

フックスは『華夷訳語』丁種本を発見した功績者であるが、語彙集を正確に理解していたわけではない。例えば、次はフックスが挙げたドイツ語語彙集の項目のうちの2件である。[30)]

図5　フックスによるドイツ語語彙集からの引用

ここに引用された注音は、ドイツ語語彙集を見るまでもなく、誤写を含んでいることが分かる。なぜならば、第1類の注音規則によれば[r]は口偏を持つ漢字で注音されるので（3.2.2）、上の各例中のReichsとehrenkrantzのkrantzの注音は下線を施した箇所に「剌」ではなく「喇」を用いて「喇愛赫斯」「克喇安慈」と書かれなければならない。[31)] また、フックスがフランス語語彙集の書名に含まれる音訳を正しく理解していなかったことにはすでに触れた

(3.3)。このようなことであるから、フックスの書いたものだからと言って、ngo-lo-ma-ni-yaというローマ字化を直ちに信用することはできない。

聶（2016）は『額呼馬尼雅話』の「額」の読みについて次のように述べている。

> 按照“西洋馆译语”的汉字译音规律，外语字母g读作[dʒ]时主要以“日”、“热”、“仁”等日母字对音，读作[g]时则以疑母字“额”对音，接近于福克斯标注“额呼马尼雅话”时用的ngo。（西洋館訳語の注音規則に照らせば、gを[dʒ]と読むときには主に「日」「熱」「仁」などの日母字によって注音されるが、[g]と読むときは疑母字の「額」によって注音される。後者はフックスのngoに近い。）

「額」の声母のことしか書かれていないが、原語をGermaniaと推定している以上、[ge]と読むということであろう。しかし、「額」はすでに述べた通り西洋館訳語においては母音の[e]を表しており（4.2）、[ge]の表示に使われるのは「格」である。また、聶は第2字の「呼」の読みについては何も述べていない。もしフックスのローマ字化に同意するのであれば、loであることになる。

5.3 「額呼馬尼雅」——私見

「額呼馬尼雅」の問題は2つの段階に分けて考察する必要がある。すなわち、まずその原語が何であるかを確定し、そのうえでその読みを考えるということである。

5.3.1 原語

「額呼馬尼雅」の原語については、2つの可能性がある。1つはラテン語のAlemanniaであり、中国の古い地理書などに「亜勒馬尼亜」「亜勒瑪尼亜」「亜勒馬尼」「阿理曼」などの音訳の形で現れる。もう1つはやはりラテン語のGermaniaであり——イタリア語における綴りもこれと共通する——、「入爾瑪泥亜」「熱爾瑪尼亜」「日爾馬尼亜」「占曼尼」などの音訳が使われていた。

原語がAlemanniaかGermaniaかという問題に関しては容易に判断を下すことができる。すなわち、小字の「呼」は音節末の[r]を表しているので、原語は確実にGermaniaであると言える。西洋人がlを誤ってrとして注音したということはまず考えられない。加えて、もし原語がAlemanniaであればlに母音eが続くので、当該の箇所は小字によらない「勒」という注音でなければならない。

5.3.2 発音

では「額呼馬尼雅」はどのように読まれる音訳だったのであろうか。Germaniaは上述の通り伝統的に「入爾瑪泥亜」「熱爾瑪尼亜」「日爾馬尼亜」「占曼尼」などと音訳されていた。それらはいずれも[dʒermanija]という発音に基づいていると見られるが、「額呼馬尼雅」もそのように読むことができるだろうか。

まず読みやすい部分について言えば、「馬」「尼」「雅」の3字は第1類の注音規則に従えばそれぞれ[ma]、[ni]、[ja]であり、いずれも判断に迷う余地がない。フックスが考えた通りである。

次に、小字の「呼」は音節末の子音[r]を表す。フックスの書いた[lo]という音節ではあり得ない―― [lo]を表す注音字は表2に見る通り「羅」である――。「額呼」はその2字で1音節を表しており、「額呼馬尼雅」は5音節語ではなく4音節語である。

したがって、解明を要するのは「額」の1字だけということになる。もし「額呼馬尼雅」を[dʒermanija]もしくは[germanija]と読むことができれば、ラテン語の一般的な読み方に一致し、問題は容易に解決を見る。しかし、すでに見た通り、「額」は[e]の注音字である。ドイツ語の語彙集においては次のように[e]ないしそれに近い母音の注音に使われている。

ドイツ語：食 essen 額斯参（飲食門260）

ドイツ語：油 Oëhl 額勒（飲食門252）

ドイツ語：労 Mühe 密額（人事門504）

念のために言えば、ドイツ語語彙集には「額」が [ge] を表しているとも解釈し得る次のような例が少数ある。

ドイツ語：肺 die Lunge 氏 隴額（身体門125）
ドイツ語：永久 dehr lange Zeit 徳呼 郎額 在特（通用門439）

しかし、このような「額」はすべて [ŋ] に続く位置に現れるので、「隴額」の2字はそれぞれ [lung]、[e] を表していると見るべきであろう。いずれにせよ、語頭の「額」が [ge] を表していると解釈し得る事例は皆無である。[32)]

そうしたことから、意表を突く解釈となるが、「額呼馬尼雅」の発音は [ermanija] であった、というのが筆者の結論である。もし [dʒermanija] であれば「熱呼馬尼雅」と注音されなければならず、[germanija] であれば「格呼馬尼雅」と注音されなければならなかった。

Germania の [ermanija] という発音は常識には合致しないものである。しかし、ラテン語語彙集の編纂に関する考察において述べた通り（4.2）、その注音者はラテン語の ge を [je] ないし [e] と読む人物であった。とすれば、通常 [dʒermanija] もしくは [germanija] と読まれるところを、注音者は [jermanija] ないし [ermanija] と読んでいたはずである。常識ではなく資料の分析に基づいて判断すれば、そのような結論とせざるを得ない。

ラテン語の [dʒ] を弱化、消失させる読み方の存在を筆者は確認できていないが、ラテン語語彙集の注音者がそのような習慣を有する人物であったことは確実である。[dʒ] の消失は ge だけでなく gi の綴りに関しても観察される。[33)]

ラテン語：三十 triginta 徳哩因達（数目門385）
ラテン語：思 cogitare 郭伊達呼（人事門489）

なお、語彙集の書名は本文とは異なる人物が書いたと考えればよいという見方もあり得る。そうすればGermaniaを [ermanija] と読むという結論を避けることができる。筆者が「四百年来東西方語言之互動――近代東西語言接触研究学術会議（2019）」（北京外国語大学、2019 年 11 月 8 ～ 9 日）で日中両語のドイツ国名の歴史に関する発表を行い、その中で「額哷馬尼雅」の読みの問題も論じたところ、史有為氏からそのような意見をいただいた。しかし、西洋館訳語 5 種の書名は、ひとまず「額哷馬尼雅」の「額」は除外するとして、現にすべて第 1 類の注音規則に忠実に従って書かれている（3.3）。そして、おそらく西洋館訳語の注音の統一に深く関与したバーが、自ら編んだドイツ語語彙集の本文に繰り返し現れる書名の表記だけを他人に任せたということはきわめて考えにくい。また、書名を別の人物が書いたと言うことは容易であるが、それだけでは「額哷馬尼雅」の読みの問題の解決にはならない。読みが [dʒermanija] だったのか [germanija] だったのか、それとも、そのいずれとも異なるものだったのか分からないからである。書名の注音を本文の注音から切り離して考えるとすれば、それは結局、「額哷馬尼雅」の読みを明らかにする手段を失い、問題の解決を永久に放棄することを意味する。

5.4　注音字「額」に関する補説

最後に、論述の複雑化を避けるためにこれまで言及を控えてきた問題について述べておく。それは、ラテン語語彙集の注音には小字の「額」の例外的な用法が見られるということである。例えば、「氷」の項目（天文門 7）で訳語 glacies は「額拉済棄斯」と注音されている。すなわち、音節頭の子音連続に含まれる子音 [g] を表すのに小字の「額」が使われている。

しかし、だからと言って「額哷馬尼雅」の「額」を [ge] と読めることになるわけではない。通常の「額」と小字の「額」の読みの問題は相互に独立している。しかも、ラテン語語彙集でも音節頭の子音 [g] は基本的に「格」で表されている。「額」の使用はわずか 7 件の項目にとどまり、しかも、語彙集冒頭の「天文門」と「地理門」に集中し、かつ、それらの 2 つの門では

「格」はほとんど使われていない。すなわち、「額」の例外的な使用は注音者が子音 [g] の表示法を確定する前の一時的な現象であったと見られる。[34)]

6　おわりに

以上、北京故宮博物院蔵『華夷訳語』丁種本の概要を確かめ、その第 1 類に属する西洋館訳語の語彙集に関わる 2 つの問題について筆者の分析、推定するところを述べた。

西洋館訳語の各語彙集が欧州の諸言語の学習にどれだけ使われたかは不明である。また、それらが後世の語彙集や辞書の編纂に利用された形跡もない。しかし、19 世紀に編まれた中国人のための英語語彙集もその多くが大なり小なり『華夷訳語』の様式を踏襲しており、西洋館訳語は語学史上その先駆として位置付けられるべき存在である。ここで述べた私見の不足や誤りの補訂を含む、故宮博物院編（2018）を用いたさまざまな角度からの研究の展開に期待したい。

［注］

1）『華夷訳語』の甲乙丙丁 4 種の区別と名称は日中両国の学界で定着している。甲乙丙の区別は石田（1931）に始まる。石田がその後の論文で紹介した『華夷訳語』の新種を大友・木村編（1968）が丁とした。

2）ただし、『西天真実名経』と題された梵語の語彙集は例外的に訳語の注音を欠き、したがって、3 類のいずれにも属さない。

3）フィリピンの言語の語彙集『蘇禄番書』は題簽の様子がほかと異なり――四辺に沿った二重線の枠があり、筆跡も異なる――、しかも、作成後長い年月を経たもののように見える。『蘇禄番書』の題簽だけが 18 世紀の編纂時に作られたもので、それ以外の語彙集の題簽はフックスによる発見の後に作り直されたのではないかとも想像される。しかし、『蘇禄番書』の題簽に書かれた書名は「蘇禄訳語」で、状況は複雑である。

4）本文では論述の煩雑化を避けるためにあえて単純化して述べたが、実際にはそのように言い切ることはできない。フックスによる語彙集の書名の扱いには不注意

による混乱があるからである。直前の注で触れた『蘇禄番書』については「蘇禄訳語」と書かれているが、それが題簽の書名を記したものなのか、混乱の一部なのかは明らかでない。

5） 西洋館訳語の題簽に書かれた言語名はそもそも18世紀のものではない可能性もある。例えば、ラテン語語彙集の書名は本文では『拉氐諾話』であるが、題簽では『拉氐諾語』である。しかし、中国で欧州の言語が「～語」という形の名称で呼ばれるようになったのは筆者の確認の限りでは19世紀以後の現象である（拙論（2020a））。もっとも、もし西洋館訳語の題簽が18世紀に書かれたものであることが確認されれば、拙論の記述を改める必要があることになる。

6） 例外となる語彙集が2つある。1つは、訳語の注音のない梵語語彙集『西天真実名経』であり、もう1つは琉球語の語彙集『琉球語』で、そこでは各項目が見出し語と訳語の注音という2要素で構成されている。

7） いずれも楽器名。

8） 西洋館訳語ではチベットや宗教に関する項目がすべて省かれたというわけではない。また、省かれた項目の中には「項」「筋」（身体門）、「醤」（飲食門）、「猛獣」（鳥獣門）のように特にチベットに関わらないものもある。

9） rの文字によって表される音声は多様であり、ドイツ語内部においても一様ではない。ここで[r]は多様なr音を区別することなく一括して示す簡略表記として用いる。

10） この項目の訳語のStrasという綴りは誤記ではない。注音から、実際[ʃtras]という発音の語として書かれていることが分かる。これに対し、先に挙げた「四季」の項目の訳語に含まれるJahrsはJahresの誤綴である。そこでの注音は[ja:res]という発音を示している。

11） ドイツ語語彙集の一定の範囲――具体的には、「花木門」の途中から「人事門」の途中まで――では[rau]という発音が「喇傲」ではなく「哷傲」と書かれ、次のような関係になっている。しかし、これは用字上の混乱に過ぎない。

哷[r(e)] + 傲[au] → 哷傲[rau]

12） ときに単漢字で表せる音節の注音に小字を使っていることもある。

ドイツ語：牌手 Schiltträger 施伊勒特德哷格哷（人物門168）

この「施伊」は次の項目に見る通り「施」1字で注音することができる。

ドイツ語：牌 Schildt 施勒特（器用門195）

両例においてSchildの綴りが異なるのは原文の通りである。

13） 『西番館訳語』にも小字の例外的と言うべき用法が見られ、硬口蓋化音で始まる音節、例えばnya、nye、nyo、nyuはそれぞれ「尼雅」「尼葉」「尼岳」「尼兪」と注音されている（施（2016, 2019））。

フランス語語彙集では[nje]は「尼葉」のように注音されている。音節の母音を表

す字を大書するこちらの記法のほうが合理的である。

14）北方方言において声母が有気音である「科」で [ko] を表し、無気音である「郭」で [go] を表すのは音声的にも自然であるが、「嘎」と「噶」によって [ka] と [ga] を注音し分けることに音声的根拠があるかどうかは不明である。

15）西洋館訳語以外では、故宮博物院編（2018）に『千崖訳語』として収められた雲南省の民族語の語彙集の書名は正しくは『干崖訳語』である。これは題簽の誤りではなく、影印本編集上の誤りである。

16）聶（2019）は、西洋館訳語の編纂は西洋人宣教師を中心に行われ、注音は正規の外国語教育を受けた中国人が担当したと述べている。

17）例えば、『華英通用雑話』で言えば、綴り字 g に対応する注音に green では「記」を使い、grass では「加」を使っている（拙論（2020b））。これは [g] の後方にある母音を [g] に添えたものと見られる。この種の母音挿入は、中国人による注音には多数の事例が見出される――『華夷訳語』丁種本第 3 類の『唉咭唎国訳語』、『紅毛番話』類の英語語彙集、『華英通語』類の英語学習書など――。

18）中国人による音声知覚の反映のように見える誤りもないわけではない。例えば、[l] と [n]、音節末の [m] と [ŋ] を混同して注音している、子音のあとに母音があるかのように注音しているなどの事例である。しかし、この種の誤りはきわめて少なく、それを過大評価することはできない。判断に迷う要素もあるが、ここでは中国人が注音した可能性と西洋人が注音した可能性とを相対評価した結果を仮説として述べた。

19）実際には多少複雑な要素もあり、訳語と注音のあいだの不一致の事例がまれに見られる。

ラテン語：温和 <u>temperatum</u> 徳穆伯哩葉斯（時令門 99）

ラテン語：涼亭 <u>domus</u> æstiva 薩拉 額斯氏斡（宮殿門 238）

フランス語：京城 ville <u>imperiale</u> 費勒 噶畢達勒德拉穆畢𠸄（地理門 66）

これらの注音は訳語と一致せず、下線部をそれぞれ temperies、sala、capital de empire に置き換えた訳語を表していると推定される――そして、フランス語の例の「拉」はおそらく「阿」の誤りである――。このような不一致が起きた理由は不明であるが、当初 temperies、sala aestiva、ville capital de empire という訳語が書かれ、それに基づいて注音されていたのだが、浄書の段階で訳語だけが修訂されたということかも知れない。

20）「三宝」は “仏、法、僧” 、「声聞」は “教えを聞く修行僧” 、「輔教」は仏教の教階の 1 つである。「読雑字」の「雑字」は民間の識字教育のための書物を表す。

21）訳語に添えた日本語の説明には不正確な点もあるかも知れない。

22）本文では西洋人にとってなじみの薄いいくつかの語について各語彙集の訳語を比較したが、校正の段階になってそれでは不十分であることに気付いた。ラテン

語語彙集では方角を表す語の翻訳に誤りがあり、「東」が“日の出”、「西」が“日没”、「南」が“正午”と訳され、ドイツ語語彙集でもその3語が“朝”、“夕方”、“正午”と訳されている。いずれの語彙集においても「北」は正しく訳されている。イタリア語語彙集では「南」が“正午”と訳されているが、「東」「西」「北」には問題がない。こうした事実を解釈するためにもやはり語彙集全体にわたる分析が必要である。

それにしても、こうした基礎語において誤訳が見られるのは不思議なことであり、このことは翻訳の過程に関してなお考察の余地が大きいことを示唆している。

23）注音の第2字についても「呼」([re])を「喇」([ra])に変える必要があると考えられる。単なる誤記か、それとも、注音者によるラテン語の読みの問題かは不明である。

24）小字の「額」に関しては例外的な用法がわずかにあるが、論述の複雑化を避けるために論文末で触れる(5.4)。

表2に見る通り、母音または[j]で始まる音節の注音に使われる漢字には影母字や疑母字が混在している。すなわち、「阿」「伊」「烏」「愛」「安」は影母字であり、「額」「鄂」「昂」「雅」「岳」は疑母字である。この混在は、西洋館訳語の注音の基礎となっている『西番館訳語』の編纂者の言語において影母と疑母の音韻的対立がすでに失われていた——おそらく、影母も疑母もすでに消失していた——ことを示唆する。実際、施(2016)に挙げられた対音表によれば、影母字の「伊」「烏」が母音のi、uを表すと同時にŋi、ŋuを表し、疑母字の「額」と「鄂」が母音のe、oを表すと同時にŋe、ŋoを表している。

25）柯(2017)によれば、バーの国籍は従来さまざまに記述されている。

柯は、国籍の如何を問わず、バーの母語は確実にドイツ語だろうと述べている。しかし、ドイツ語語彙集の訳語やその綴りには現代の標準的なドイツ語に頼って考えれば誤りと思しきものも多く、バーの母語の問題は筆者には判断が付かない。

26）春・李・郭(2018a, 2018b)は、先に『暎咭唎国訳語』が編まれ、その見出し語を拡充して西洋館訳語が編まれたと述べている。しかし、実際のところは、『暎咭唎国訳語』は乙種本『西番訳語』の見出し語をそのまま使って編まれ、西洋館訳語は乙種本『西番訳語』の見出し語を大幅に増補して編まれた『西番館訳語』の見出し語を調整して使って編まれている。『暎咭唎国訳語』と西洋館訳語の編纂の順序の問題については拙論(2021)で論じる。

なお、春・李・郭(2018a, 2018b)に書かれた西洋館訳語と『暎咭唎国訳語』の収録項目数はその大半が誤っていることも注意を要する。

27）図3に示したものとは異なる派生の過程も理屈のうえではあり得るが、例えば、地名の「臨洮」を追加して「大乗」を削除するといった逆方向の処置はその動機を想像しがたい。「臨洮」は現在では甘粛省の県で、黄河の支流洮河が流れる。『史記』に万里の長城の西の起点として記されている。

28）ドイツ語語彙集の影印には、71頁と235頁に誤ってそれぞれ73頁、237頁の内容

が重複して印刷されているという問題がある。このため71頁と235頁に本来あるべき計8項目は確認することができないが、項目数の統計に影響を与える要素はおそらくない。

29）王（近刊）の指摘によれば、乙種本『西番訳語』、『西番館訳語』、西洋館訳語5種を比較すると一部の見出し語の用字に不一致が見られる。用字の一致、不一致の複雑な様相が語彙集の継承関係の反映なのか、書写の過程で偶然的に生じたものに過ぎないのかは未詳である。

30）引用の様式に見る通り、フックスは語彙集をドイツ語-中国語の対訳と考えている。しかし、実際には、見出し語は中国語で、ドイツ語が訳語である。フックスがなぜそのような初歩的な誤りを犯したのか不可解である。と言うのは、Fuchs（1931）では正しく中国語を見出しとする形で語彙集の項目例を引用しているからである。ところが、Fuchs（1937）では論文表題に“最初のドイツ語-中国語語彙集”（‘das erste Deutsch-Chinesische Vokabular’）と書き、本文でも“ドイツ語の下に中国語の訳語（‘die chinesische Übersetzung’）が書かれている”と明確に述べている。

31）加えて、第2例には「刺」ではなく「刺」が使われている。これは印刷の過程で生じた誤りである可能性もある。

32）正確を期して言えば、類似の音韻環境で[ge]を表す「格」を使った例もある。実際には「郎格」と書かれているが、本来必要な「施」を補って引用する。

ドイツ語：蛇 Schlange 施郎格（鳥獣門357）

このようなことがあるので問題は複雑であるが、語頭の「額」が[ge]を表していると解釈し得る事例がないことには変わりがない。

33）ただし、giの綴りについては[dʒ]の音を使って注音した事例もある。

ラテン語：図書 sigillum privatum 西日魯穆 伯哩幹都穆（文史門334）

34）このことは、ラテン語語彙集の注音者の疑母に関する理解が『西番館訳語』の注音者のそれ（注24）とは異なっていたことを示唆する。注音者は自身の理解に基づいて注音を始め、間もなくそれが『西番館訳語』に基づく注音の方針に合わないことに気付き、[g]の注音に「額」を使うのをやめたものと考えられる。

なお、ラテン語語彙集と同じ人物によって注音されたと考えられる（4.2）ドイツ語語彙集では音節頭の[g]は最初から一貫して「格」で注音されている。このことに基づいて推定すれば、注音はまずラテン語語彙集から始められたことになる。

［文献］

石田幹之助（1931）「女真語研究の新資料」桑原博士還暦記念祝賀会編『桑原博士還暦記念 東洋史論叢』（弘文堂書房）

大友信一・木村晟（あきら）編（1968）『日本館訳語—本文と索引—』（洛文社）

田野村忠温（2020a）「日本語の呼称の歴史」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第60巻
田野村忠温（2020b）「注音の『切』、『合』、小字」内田慶市・田野村忠温編著『『華英通語』四種―解題と影印―』（関西大学出版部）
田野村忠温（2021）「『暎咭唎国訳語』の編纂者と編纂過程」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第61巻
春花・李英・郭金芳（2018a）「清乾隆年编《华夷译语》述论」『故宫学刊』2018年第1期（紫禁城出版社）
春花・李英・郭金芳（2018b）「論清乾隆年編『華夷譯語』」故宮博物院編『故宮博物院藏乾隆年編華夷譯語』第1巻（故宮出版社）
冯蒸（1981）「“华夷译语”调查记」『文物』1981年第2期（文物出版社）
故宮博物院編（2018）『故宮博物院藏乾隆年編華夷譯語』全18巻（故宮出版社）
柯卉（2017）「在华耶稣会士与后“礼仪之争”时代―以德意志耶稣会士魏继晋为例」『德国研究』2017年第2期（同济大学德国问题研究所）
李思汉（2019）「《华夷译语―拉氏诺话》初探」李雪涛・沈国威主编『亚洲与世界』第2辑（社会科学文献出版社）
聂大昕（2016）「乾隆“西洋馆译语”书题语源考」『文献』2016年第6期（中国国家图书馆）
聂大昕（2019）「《暎咭唎国译语》编纂流程考」『北方民族大学学报（哲学社会科学版）』2019年第1期
施向东（2016）「新出故宫本《西番译语》的若干特点初探」第四届中国西南地区汉藏语国际研讨会（The University of Washington、2016年9月10日）会议论文
施向东（2019）「清抄本《西番译语》藏汉对音译例研究」『民族语文』2019年第4期
孙伯君（2010）『西夏新译佛经陀罗尼的对音研究』（中国社会科学出版社）
孙伯君（2020）「“华夷译语”汉字注音法考源」『北方民族大学学报（哲学社会科学版）』2020年第2期
王铭宇（近期出版）「清乾隆年抄本六种“西洋译语”汉文词目考」『国际汉学』卷期未定
杨玉良（1985）「一部尚未刊行的翻译词典―清官方敕纂的《华夷译语》」『故宫博物院院刊』1985年第4期
Fuchs, Walter（1931）‘Remarks on a new “Hua-I-I-Yü”（華夷訳語）’. *Bulletin of the Catholic University of Peking*, No. 8.（『輔仁英文學誌』第8期）
Fuchs, Walter（1937）“Das erste Deutsch-Chinesische Vokabular vom P. Florian Bahr”. Fritz Jäger and Erwin Rousselle（eds.）*Sinica-Sonderausgabe, Jahrgang 1937, Forke-Festschrift, Heft I*. Frankfurt: Verlag des China-Instituts an der J. W. Goethe-Universität.
Knight, Stan（1996）‘The Roman alphabet’. Peter T. Daniels and William Bright（eds.）*The World’s Writing Systems*. New York and Oxford: Oxford University Press.

（文学研究科教授）

SUMMARY

An Analysis of the Glossaries of Five European Languages Officially Complied in the Mid-Eighteenth Century China

Tadaharu Tanomura

The Palace Museum of Beijing stores manuscripts of glossaries of 42 languages or dialects officially compiled in the mid-eighteenth century. The manuscripts were discovered in 1931 by the German sinologist Walter Fuchs, and were published for the first time ever since in 2018.

Among the manuscripts are included six glossaries of distinct quality, which are ones of Tibetan and five European languages, viz., Latin, German, Portuguese, French and Italian.

This article, after some preliminary observations about the six glossaries, will address the following two questions involving them: 1) By whom and how were the European glossaries compiled? 2) What is the proper noun in the title of the German glossary and how is it to be pronounced? These seemingly independent questions are in fact closely interrelated, and we can only answer them by analyzing all the relevant glossaries.

With regard to the first question, it will be argued, among other things, that the Latin glossary was compiled by two Europeans, one possibly being the compiler of the Italian glossary, and the other unquestionably being the compiler of the German glossary. As for the second question, it will be argued that the proper name in the title of the German glossary is the Latin term *Germania,* which was intended to show an exceptional pronunciation [ermanija], not the common Latin pronunciations [germanija] or [dʒermanija].